

いわゆる「多元論」の提唱が行われた（注2）。その多元論を援護する重要な発掘調査となつたわけである。居屋敷窯跡（注3）は旧豊前国の海岸近くに位置し、地理的に影響が考慮され、瀬戸内と直結する。このことが意味することは今後多くの問題を提供する。

注1 田辺昭三「須恵器の誕生」『日本美術工芸』三九〇 一九七一年

注2 中村浩「須恵器生産の諸段階—地方窯成立に関する一試考—」『考古学雑誌』第六七卷第一号 一九八一年

注3 副島邦弘編『居屋敷遺跡』一般国道10号椎田道路関係埋蔵文化財調査報告書第6集 福岡県教育委員会 一九九六年

第四節 京築地域の古墳文化

一 古墳の変遷

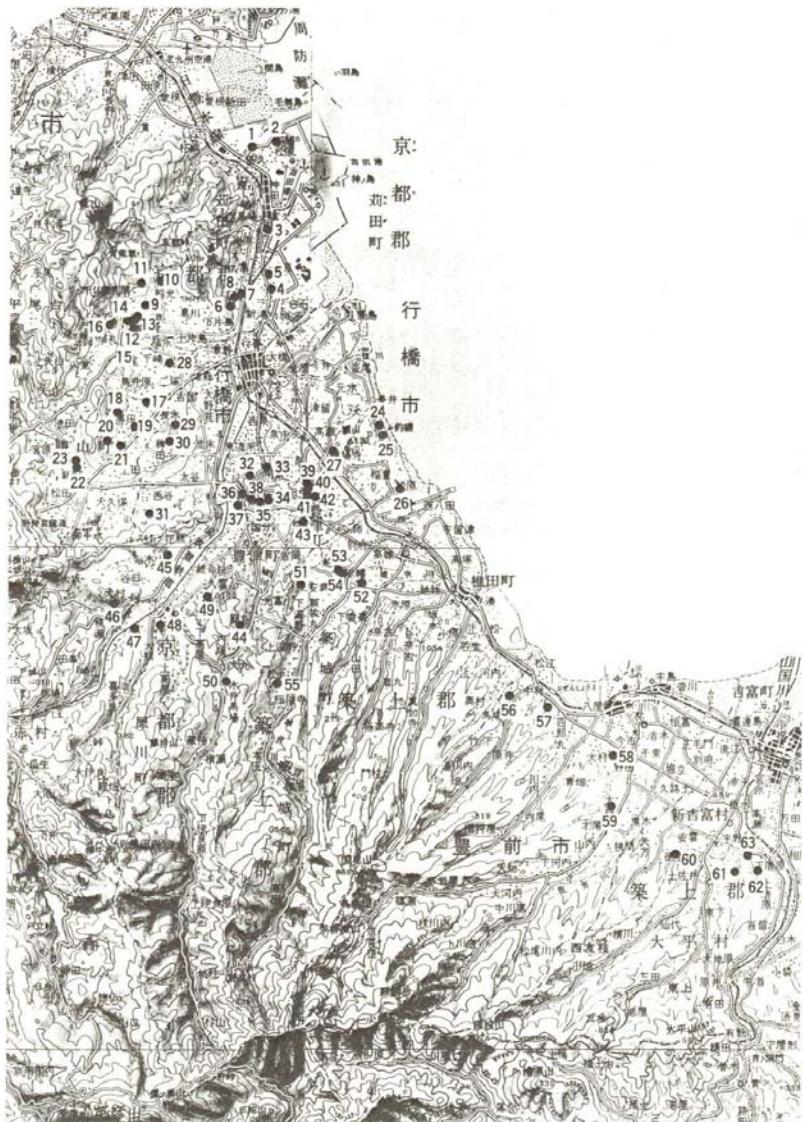
京築地域は畿内から九州に至る玄関口にあたる。このため、既に弥生時代前期に広い京都平野が水田に開発され、その後生産力の拡大と人口の増加に伴い、九州北部から瀬戸内海沿岸や畿内に渡る人や物の中継地となっていた。古墳時代が始まる三世紀末に大和政権が誕生すると、中国地方および北部九州各地の豪族が、その連合政権下に参入した。豊前国は江戸時代に徳川幕府の譜代大名である小笠原氏が九州の諸大名の監視役として配置されたように、畿内政権にとつて九州をその勢力下におくための重要な拠点であった。

このため、いち早く連合政権に参加することが求められ、その結果当地域を代表する豪族の墳墓として築造されたのが苅田町石塚山古墳である。しかし、四世紀後半から五世紀前半にかけて大和政権が国内的に安定してくると、当地域には大型の前方後円墳は造られない。五世紀後半になると有力豪族の前方後円墳として苅田町御所山古墳が築造される。この古墳は石塚山古墳とほぼ同規模の大型古墳である。その後、五世紀末から六世紀代にかけて、首長層の地位が相対的に地盤沈下したためか、前方後円墳は築造されるものの規模は小型化していく。そして六世紀末には、首長層は前方後円墳に代わって円墳や方墳を築造するようになる。以下、各時期ごとに当地域の古墳の変遷を概観する（第45図・第7表参照）。

前期の古墳

弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて、当地域内の小地域を代表する首長層は、方形周溝墓や墳丘墓を営んでいる。一方、古墳時代の始まりとともに大和を中心とする連合政権にくみした、当地域全体を統括した首長はその死後（四世紀初頭）に石塚山古墳に埋葬された。この古墳は瀬戸内海西部の周防灘の海岸近くに立地し、墳丘は全長一一〇メートル、高さ九・五メートルで、前方部は先端がやや撥形に開く古い型式を残す（第46図）。内部主体は後円部中央にあり、長さ五・四メートル、幅約〇・九メートルの竪穴式石室である。棺は割竹形木棺の可能性がある。石室は寛政八年（一七九六）に開口されたのち、昭和十二年（一九八七）に本格的な発掘調査が実施され、三角縁神獣鏡七面以上（伝一一一四面）と琥珀製勾玉一点・碧玉製管玉三点・素環頭大刀一振り・鎌二三本以上、小札革綴冑一領、鉄斧五点などが出土している。以上のように、石塚山古墳は墳丘・内部主体・副葬品の面で、まさに大和政権とのつながりの深さを示すとともに、この時期としては九州を代表する前方後円墳である。また、被葬者は三角縁神獣鏡も九州内で最も数多く保有

第4章 古墳時代



第45図 京築地域の古墳時代主要遺跡分布図（縮尺1/280,000）

第7表 京築地域の古墳時代の主要遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時期	備考
1	雨窪古墳	京都郡苅田町若久町	6世紀末	円墳
2	松山古墳群	京都郡苅田町大字松山	5～6世紀	円墳8基・方墳1基小石室5基他
3	石塚山古墳	京都郡苅田町大字富久	4世紀初頭	前方後円墳、全長110メートル
4	御所山古墳	京都郡苅田町大字与原	5世紀後半	前方後円墳、全長118メートル、周濠有
5	番塚古墳	京都郡苅田町大字尾倉	5世紀末～6世紀初頭	前方後円墳、全長50メートル
6	百合ヶ丘古墳群	京都郡苅田町大字新津	5～6世紀	円墳30基
7	新津原山古墳群	京都郡苅田町大字新津	5～6世紀	円墳7基
8	恩塚古墳	京都郡苅田町大字新津	6世紀後半	円墳、径25メートル
9	神後古墳	京都郡苅田町大字谷		前方後円墳
10	谷遺跡	京都郡苅田町大字谷	4世紀初頭・5～7世紀	住居跡16軒
11	山口南古墳群	京都郡苅田町大字山口	6世紀後半	円墳3基
12	黒添・赤木遺跡	京都郡苅田町大字黒添	4世紀・8世紀	住居跡9軒
13	木ノ坪遺跡	京都郡苅田町大字法正寺	弥生時代後期～4世紀	住居跡87軒
14	黒添夫婦塚古墳	京都郡苅田町大字黒添	6世紀中葉～後半	前方後円墳、全長40メートル
15	徳永丸山古墳	行橋市大字徳永	6世紀中葉～後半	前方後円墳、全長40メートル
16	福丸古墳群	行橋市大字福丸	6世紀後半	円墳3基
17	八雷古墳	行橋市大字長木	6世紀初頭	前方後円墳、全長80メートル、周濠有
18	寺田川古墳	京都郡勝山町大字下黒田	6世紀前半	前方後円墳、全長40メートル
19	庄屋塚古墳	京都郡勝山町大字下黒田	6世紀中葉	前方後円墳、全長40メートル
20	綾塚古墳	京都郡勝山町大字上黒田	7世紀前半	円墳、直径34メートル、周濠有、家形石棺有
21	橘塚古墳	京都郡勝山町大字上黒田	6世紀末～7世紀前半	方墳、直径40メートル
22	箕田丸山古墳	京都郡勝山町大字箕田	6世紀中葉	前方後円墳、全長90メートル
23	扇八幡古墳	京都郡勝山町大字箕田	6世紀前半？	前方後円墳、全長58メートル、周濠有
24	稻童古墳群	行橋市大字稻童	5世紀	円墳25基
25	石並古墳	行橋市大字稻童	5世紀後半	前方後円墳、全長68メートル、周濠有
26	渡築紫遺跡	行橋市大字稻童	6世紀後葉～7世紀末	円墳・方墳等29基、住居跡32軒他
27	隼人塚古墳	行橋市大字高瀬	6世紀後半	前方後円墳、全長40メートル
28	ビワノクマ古墳	行橋市大字延永	5世紀	円墳、径25メートル
29	前田山遺跡	行橋市大字検地	4世紀・6世紀～8世紀	住居跡2軒、横穴墓約120基他
30	下稗田遺跡	行橋市大字下稗田	4世紀初頭～7世紀前半	住居跡102・円墳等8・横穴墓2他
31	内屋敷遺跡	行橋市大字津積	5世紀後半～6世紀前半	住居跡3軒
32	竹並遺跡	行橋市大字竹並	4世紀～7世紀	円墳28・方墳10・横穴墓約2000
33	ヒメコ塚古墳	行橋市大字竹並	6世紀後半	前方後円墳、全長40メートル
34	金築遺跡	京都郡豊津町大字惣社	7世紀前半～8世紀	住居跡65軒
35	惣社古墳	京都郡豊津町大字惣社	6世紀中葉～後半	前方後円墳、全長30メートル
36	甲塚方墳	京都郡豊津町大字国作	6世紀後半	方墳、全長46.5メートル、周濠有
37	彦徳甲塚古墳	京都郡豊津町大字彦徳	6世紀後半	円墳、直径29メートル、二重周濠有
38	柱松古墳群	京都郡豊津町大字惣社	4世紀後半	円墳2基
39	居屋敷遺跡	京都郡豊津町大字徳永	5世紀前半	窯跡1基、横穴墓15基
40	鋤先遺跡	京都郡豊津町大字徳永	6世紀後半～7世紀前半	円墳7基・横穴墓4基

第4章 古墳時代

番号	遺跡名	所在地	時期	備考
41	徳永川ノ上遺跡	京都郡豊津町大字徳永	6世紀初頭～7世紀	円墳18基・方墳4基・小石室4基
42	源左エ門屋敷遺跡	京都郡豊津町大字徳永	6世紀後半～7世紀初頭	住居跡11軒、掘立柱建物跡
43	皆見カワラケ田遺跡	京都郡豊津町大字皆見	6世紀後半～7世紀前半	住居跡6棟、掘立柱建物跡
44	北垣古墳群	京都郡豊津町大字節丸	5世紀後半～6世紀	円墳9基他
45	姫神古墳	京都郡犀川町大字本庄	6世紀前半？	前方後円墳、全長37メートル
46	上大村古墳	京都郡犀川町大字大村	6世紀中葉～後半	前方後円墳、全長30メートル
47	大熊古墳	京都郡犀川町大字大熊	6世紀中葉～後半	前方後円墳、全長30メートル
48	本庄古墳	京都郡犀川町大字本庄	6世紀中葉～後半	前方後円墳、全長30メートル
49	下前田遺跡	京都郡犀川町大字末江	5世紀後半～6世紀	住居跡20軒・掘立柱建物跡5棟他
50	タカデ遺跡	京都郡犀川町大字木井馬場	5世紀前半～7世紀前半	住居跡36軒
51	茶臼山東窯跡	築上郡築城町大字船迫	6世紀後半	須恵器窯跡3基
52	十双遺跡	築上郡築城町大字赤幡・広末	弥生時代後期～4世紀	住居跡31軒
53	安武・土井の内遺跡	築上郡築城町大字安武	6世紀後半	住居跡9軒
54	安武・深田遺跡	築上郡築城町大字安武	6世紀前半～8世紀中葉	住居跡66軒
55	松丸F遺跡	築上郡築城町大字松丸	7世紀初頭～7世紀末	製鉄炉跡1基
56	団後遺跡	豊前市大字中村	4世紀初頭～6世紀～奈良	住居跡2軒
57	黒部古墳群	豊前市大字松江	6世紀前半～7世紀前半	円墳7基、うち装飾古墳1基
58	荒堀中ノ原遺跡	豊前市大字荒堀	6世紀後半～7世紀前半	住居跡32・掘立柱建物26・倉庫16
59	上大西遺跡	豊前市大字上大西	5世紀	住居跡2軒
60	山田窯跡	築上郡新吉富村	7世紀前半～後半	窯跡3基
61	穴ヶ葉山古墳群	築上郡大平村大字下唐原	6世紀後半	円墳4基
62	能満寺古墳群	築上郡大平村大字下唐原	4世紀前半～中葉	3号墳は前方後円墳、全長35メートル
63	金居塚古墳	築上郡大平村大字下唐原	4世紀？	前方後円墳

していることから、単に地域の豪族といふだけでなく、豊国の首長であることを示している。

続く四世紀後半に豊国を統括するような首長クラスの古墳としては、東国東の小熊山古墳が知られている。つまり、豊国の中心が一時的に京都郡から移動した可能性も考えられる。

一方では、小地域の有力集団の墓地に豊津町柱松古墳群がある。当古墳群中の一基は、墳丘が直径約二八メートルの円墳で、内部主体は大型箱式石棺と考えられている。副葬品には仿製の銅鏡二面と鉄剣四振り・鉄刀一振り・刀子五点などがある。古墳の建造場所から推定して、当古墳の被葬者は祓川中流域を代表する首長であろう。また、北方約八〇〇メートルに所在する

行橋市竹並遺跡では、一〇ドル前後の規模

の墳墓が多数調査されている。これらの内部主体は箱式石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓からなり、副葬品も少ないが、全体的には弥生時代後期終末から古墳時代中期には弱い小集団の人々の墓地と考えられる。

中期の古墳 中期の五世紀後半代になると再び京都郡に大型の

古墳が出現する。苅田町御所山古墳は石塚山古墳の南方約一・九メートルで、当時の海岸部に位置する前方後円墳である(第47図)。墳丘は全長一八メートル、高さ一〇・五メートルで、周溝を含めた墓域は全長約一四〇メートルに達する。前方部は三段築成し、くびれ部には方形の造り出しを持つ。内部主体は後円部上位にあり、竪穴系横口式石室である。この石室は板石を周囲に立てて壁を設置し、床面には奥壁に並列して仕切り石で区画した一つの屍床を持つ特異な形態で、「筑紫國造の統轄する筑肥地方の影響」があると考えられている。遺物は、石室内から四禽四乳鏡、硬玉製勾玉・棗玉・碧玉製管玉・ガラス製丸玉・金銅製雲珠などが出土し、墳丘では円筒埴輪などが採集されている。御所山古墳の出現は、豊國の大首長權が再び旧京都郡域の首長のもとに握られたことを示している。



第46図 苅田町石塚山古墳測量図 (縮尺1/1,600)

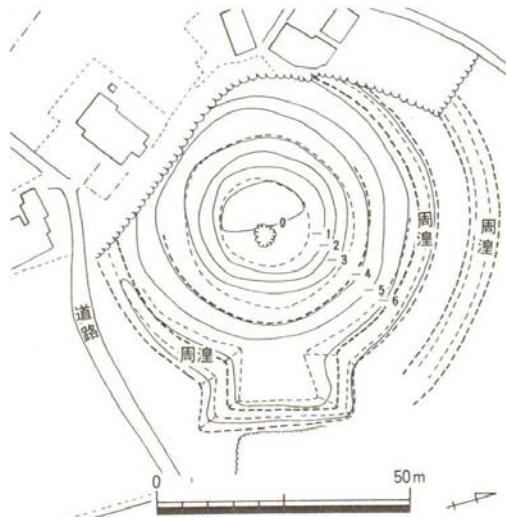
第4章 古墳時代

御所山古墳とほぼ同時期の旧仲津郡の首長の古墳に行橋市石並古墳がある。この古墳は海岸砂丘上に立地し、円形の墳丘に大型の造り出しを設ける。いわゆる帆立貝式前方後円墳である（第48図）。墳丘は二段築成で、全長六八メートル、高さ五・五メートルで、二重の周溝を含めると八〇メートル前後の規模になる。内部主体は不明であるが、墳丘には葺石や円筒埴輪が確認されている。

この時期大和政権の倭の五王による日本統一が進む一方で、大陸との関係が密になり、全国の大首長級の古墳が大きくなるのはみのがせない。御所山古墳もそのような時代背景の中に位置づけられる。御所山古墳



第47図 莺田町御所山古墳（莺田町教育委员会提供）

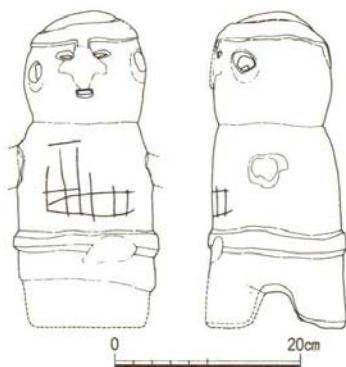


第48図 行橋市石並古墳墳丘測量図

の首長は豊国を代表する石塚山古墳の首長以降、その本拠地または奥津城（墳墓の地）を京都平野北部に置いていた。一方、京都平野南部で新しく頭角を現してきた石並古墳の被葬者はのちの仲津郡に相当する地域の首長である。

やや時期が下つて五世紀末には御所山古墳の北方約四〇〇メートルに苅田町番塚古墳が築造される。番塚古墳は墳丘が全長約五〇メートルとやや小型の前方後円墳であるが、竪穴系横口式石室の内部から神人歌舞画像鏡一面、勾玉六点・管玉三六点を含む玉類五八九点以上・金製耳環二点などの装身具、大刀三振り・矛七本・鉄鎌一三〇点以上などの武器、挂甲一領・胡籠一個などの武具、馬具一組、鉄斧四点・刀子四点・鉈一点などの工具と金銅製飾金具、編み物片などとともに蟾蜍形木棺飾金具が出土している。また、墳丘からは円筒埴輪も見つかっており、被葬者は豊国の大首長の系譜を引くものである。また、南部では吉富町榆生山古墳が五世紀中ごろの小型の前方後円墳（帆立貝式？）であり、直刀数振り・鉄鎌一本・鉄鎌二本などの武器が出土し、墳丘からは円筒埴輪や家形埴輪の一部かと考えられる小片が出土している。更に、大平村下唐原の金居塚古墳は、全長六〇メートルほどの古式の前方後円墳であることが確認されている。

一方、各地域の小集団も中葉から後葉に円墳を営んでいる。京都平野北部の海岸部では、苅田町松山古墳群・同町猪熊1号墳・同町新津原山古墳群などがあり、平野南部にも行橋市稻童古墳群が築造されている。また、内陸部では行橋市ビワノクマ古墳・勝山町箕田古墳群・犀川町長迫古墳・同町木山平1号墳などがある。これらの古墳の内部主体は箱式石棺や竪穴式石室と新來の竪穴系横口式石室があり、副葬品も稻童21号墳で短甲・眉庇付冑・鉄刀・馬具・鏡・三環鈴、ビワノクマ古墳で鏡や素環頭大刀・挂甲・長迫古墳でも鏡

第49図 行橋市八雷古墳出土
人物埴輪実測図

や直刀・短甲など豪華である。この時期、小地域の首長層も経済的に地力をつけていたものと推測される。

後期の古墳

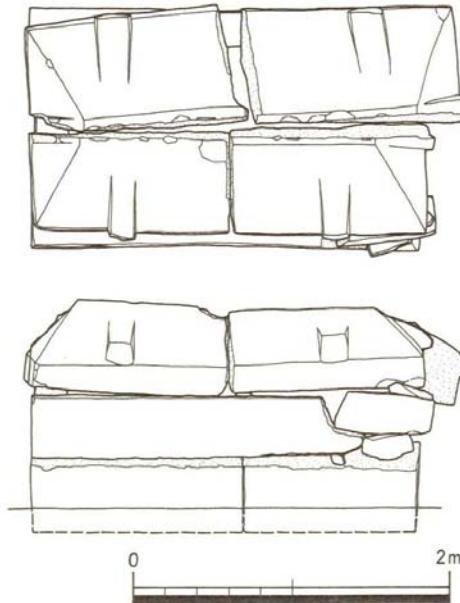
六世紀代になると京都平野北部の当地域の代表的首長は、内陸部に後退し、古墳の規模も相対的に小さくなる。これは九州北部の諸豪族の強大化と、繼体二十二年（五一七）の筑紫国造磐井の反乱を経験して、大和政権が安閑二年（五三五）に戦略的要所に設置した屯倉の影響と考えられる。屯倉は関東から九州に二六か所設置されたが、京都平野では北部の海岸部に肝等屯倉が置かれたため、在地豪族は海岸部での勢力拡大が困難になり、代わって内陸部の開発に取り組んだものと考えられる。この時期の京都平野北部の首長墓には行橋市八雷古墳（第49図参照）・勝山町庄屋塚古墳・同町箕田丸山古墳・同町扇八幡古墳などがある。

一方、のちの仲津郡に相当する地域では、京都郡に相当する地域と比べると小規模な行橋市ヒメコ塚古墳・同市隼人塚古墳・犀川町姫神古墳・豊津町物社古墳などの前方後円墳が造られる。これらの古墳はのちの仲津郡域を支配した首長の墓と考えられる。ここで留意すべきことは、のちの仲津郡域における首長墓は石並古墳に始まり、それ以降首長墓が継続していることである。

六世紀後半を過ぎると、首長たちが好んで造った前方後円墳は採用されなくなり、代わって首長たちは巨石を使つた横穴式

石室をもつ大型円墳や大型方墳を採用するようになる。京都郡では勝山町綾塚古墳（円墳・第50図参照）・同町橋塚古墳（方墳）が造られ、仲津郡では二重の周溝をめぐらす豊津町彦徳甲塚古墳（円墳）や長方形の墳丘をもつ同町甲塚方墳（方墳）が造られる。いずれも首長墓であるが、方墳を造った首長たちは大和政権内で力を發揮していた蘇我氏との関係を思わせる。また、豊国内において政治的中心地が旧京都郡から旧仲津郡へと変化したのも、まさに六世紀後半から七世紀初頭である。

六世紀代には、小地域の集団の生産力も向上し、有力農民層が家父長制家族として自立し、各地に小円墳



第50図 勝山町綾塚古墳家形石棺実測図

第51図 行橋市渡築紫遺跡古墳全景写真
(行橋市教育委員会提供)

や横穴墓からなる群集墳を営むようになる。京築地域では苅田町法正寺地区から行橋市椿市地区や、勝山町黒田地区、御所ヶ谷から馬ヶ岳北麓、行橋市東部の観山、豊津町節丸地区などに集中し、行橋市・京都郡内だけでも二〇〇基を超えると推定される。時期的には五世紀代後半から築造が始まり、七世紀初頭には新たな古墳の築造は減少する。行橋市渡築紫遺跡（第51図）や椎田町石堂中後ヶ谷遺跡などでは七世紀後半まで築造されている。

二 集落の変遷

前期の集落

古墳時代初期の集落は、弥生時代後期後半の集落から継続して営まれているものが多い。下
前
期
の
集
落
碑田遺跡では弥生時代後期中ごろから古墳時代前期初頭の集落が、標高三〇メートル前後の丘陵部に営まれており、住居跡七七軒が調査されている。このうち、弥生時代後期最終末から古墳時代初頭に属する住居跡は四軒ほど確認されている。苅田町葛川遺跡や行橋市矢留遺跡などでもほぼ同時期の集落が調査されているが、集落の立地環境や住居の規模・構造は類似している。これに対して、苅田町木ノ坪遺跡の集落の場合、沖積平野奥の周囲の水田面とはほとんど標高差がない微高地縁辺部に立地する点が異なっている。この種の集落は築城町十双遺跡でも三軒が確認されている。

この時期の集落に共通する特徴は、弥生時代後期から連続して営まれ、古墳時代前期中葉には消滅することである。住居の構造は、平面形がやや長方形で、規模は一辻が四~六メートル前後である。主柱穴は四本